

# 宇野浩二一家系図について

増田周子

宇野浩二は大正八年に発表した「蔵の中」で文壇にデビューする。その饒舌な語り口は、菊池寛らが「大阪落語」のようだと誇ったが、大正期の文芸において、一種独特の異彩を放っている。佐藤春夫が「秋風一夕話」(「随筆」大正13年10月・11月号)で、芥川龍之介を「都会人過ぎて、「自己を露骨に語る野蠻に耐へない心情」に「窮屈なチョッキを着て」いると評した。宇野浩二は芥川龍之介のように「窮屈なチョッキ」を着るようなことは終生なかった。芥川龍之介は、名工が鑿で丹念に彫るように、一字一句を練りに練った端正な楷書体で作品を書いた。喋りすぎぐらいお喋りな宇野浩二の文体は、大正期の文芸において、この芥川龍之介と対照的な位置を占めるのではないかと思う。

川端康成は、エッセイ「末期の眼」(「文芸」昭和8年12月号)の中で、「芸術家は一代にして生れるものでないと、私は考へてゐる。父祖の血が幾代かを経て、一輪咲いた花である。例外も少しあらう

が、現代日本作家だけを調べても、その多くは旧家の出である」と述べている。人は誰でも真面目に努力さえすれば、すべての人々が芸術家になれるというものではない。芸術家としての才能は、努力以外に、その人固有に備えた天性の特別なものが大きくあるのである。芸術家は「一代にして生まれるもの」でなく、代々の芸術的教養が伝わって生まれてくる一面があるとすれば、宇野浩二の饒舌な語り口も、宇野浩二一代で培われたものではなからう。何世代にもわたって受け継がれた素質であったと考えられる。とすれば、宇野浩二の先祖や生い立ちについての調査も必要であらう。

宇野浩二は「身の事」を書いたエッセイ「遠方の思出」の「その六 父母の思出」(「遠方の思出」昭和16年5月20日発行、昭和書房)のなかで、自ら「宇野家系図 一軸」を、次のように紹介している。

「滋野姓

「清和天皇御子貞之親王九代

「滋野幸広（海野弥平四郎代々用雁金之紋）——幸氏（海野小

太郎左衛門尉）——幸継（海野信濃守於同所十万町）——幸家——

——氏広——氏経（海野平次 織田信長不用風諫故切腹）——氏

行（海野小左衛門食<sub>二</sub>居於泉州<sub>一</sub>、每折大鳥明神<sub>二</sub>武門再興<sub>一</sub>）——

氏道——幸勝（海野平次右衛門 従大阪度々被招<sub>二</sub>不<sub>一</sub>応良輔之

寸雖有曾不行 童名槌千代以<sub>二</sub>大鳥明神<sub>一</sub>稱<sub>二</sub>氏神<sub>一</sub>、曾大鳥明神者

日本武尊也至者）——幸経——幸成——行辰——幸則——孝教

（宇野源次兵衛 延享年中）——幸久——氏景（宇野武右衛門

宝曆年中）——景龍（宇野新左衛門 明和年中）——顯興

（宇野彦兵衛門 天明年中）——真則（宇野良右衛門 弘化年

中）——格（宇野善三郎姓滋野嘉水<sub>二</sub>己酉年十月出番明治<sub>一</sub>己

年十月四日被大阪府権少属云云）——六三郎（善三郎長男也）

宇野浩二は、この系図を「私が二十歳の頃、母から見せられたも

のであるが、その頃は殆ど興味がなかったが、七八年前、ふと机の

引出の中から発見した時、その中の『本国 信濃』といふ所と、海

野小太郎といふ所と『織田信長不用風諫故切腹』といふ所とに一種

の興味を覚えたので、それを思ひ出して、ここに写してみた」ので

あると述べている。川端康成は「文学的自叙伝」で「私が北條泰時

三十一代かの末孫といふ、疑はしい系図がある」といい、宇野浩二

も川端康成と同様に、「旧家の出」であったようだ。

さて、宇野浩二が「遠方の思出」で紹介している『宇野家系図

一軸』なるものが実際に存在するのか、それが確認された報告はま

だない。宇野浩二の生涯を描いた評伝としては、水上勉『宇野浩二

伝上・下』（昭和46年10月11日・11月25日発行、中央公論社）があ

る。榎本隆司は『国文学解釈と鑑賞別冊〈研究情報と資料〉』（昭

和61年11月20日発行、至文堂）で、水上勉『宇野浩二伝上・下』を

「身近に見た宇野をとらえて余人の知らぬ作家像を彫り上げている。

とくに、「先生の実像をみつめたい」と苦心の踏査を重ねた水上の

力作は、作家の方法をさぐって示唆に富んでいる」と評した。水上

勉の『宇野浩二伝上・下』は、宇野浩二の父の福岡にある碑文を探

しだすなど、伝記的事実の新発見が多くあるだけでなく、評伝文学

としても傑出している。だが、水上勉『宇野浩二伝上・下』は、宇

野家系図について、宇野浩二の「遠方の思出」の記述をそのまま引

用しているだけにすぎない。そこで、宇野浩二の遺族、宇野守道が

所蔵されている『宇野家系図 一軸』を閲覧させていただいたので、

この機会に、それを紹介しておきたい。

宇野家系図は巻物の形態、幅十八種である。題簽は横一程六耗、

縦十三程七耗で、『宇野家系図 一軸』とある。この『宇野家系図

一軸』の全文を次にあげる。

宇野家系圖 本國信濃

滋野 姓

清和天皇御子貞元親王九代

滋野幸十広

海野弥平四郎代々用雁金之紋

幸 氏

海野小太郎 左衛門尉

幸 繼

海野信濃守於同所賜十萬町

幸 家

海野小太郎 後信濃守

幸 方 小次郎

氏 廣

海野左近

氏 經

海野平次 織田信長不用風諫故切腹

氏 行

海野小左衛門食居於泉州、每折大鳥明神

武門再興 号大龍院茲雲靈現居士

氏 光

氏 道

孝 次

幸 勝

海野平次右衛門從大阪度々被招不応良輔

之寸雖有曾不<sub>レ</sub>行 童名植千代以大鳥明神稱

氏神、曾大鳥明神者日本武尊也室者 内藤

左衛門尉女亡 号高松院快風涼然居士

幸 經

海野又次郎 元禄年間

幸 成

海野又左衛門 常応居士

行 辰

海野又兵衛

幸則

海野忠左衛門当代享保年中諸家系譜  
御改可差出之所因眼疾及延引<sup>至</sup>

女 貞照尼

幸春

幸教

宇野源次兵衛

延享年中

幸久

宇野源次兵衛

氏景

宇野武右衛門

宝曆年中

景龍

宇野新左衛門

明和年中

頭興

宇野彦兵衛門

天明年中

真則

宇野良右衛門

弘化年中

格

宇野善三郎姓弥滋野嘉永二己酉年十月出番  
明治二己年十月四日被任大阪府權少屬<sup>至</sup>

六三郎 善三郎長男也

宇野きよう宝珠京登大姉(昭一〇・一〇・一五没)

崎太郎 信普法道居士(昭和一九・二・二八没)

格次郎・号・浩二・文徳院全誓貫道浩章居士

(昭和三六・九・二一寂)

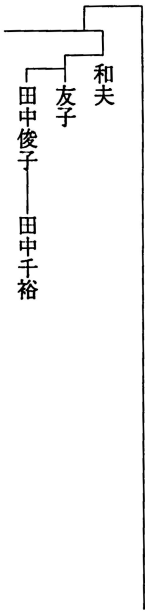
日本芸術院会員昭和二四・四・一・文部大臣高瀬莊太郎  
従四位勲三等瑞宝章昭和三六・九・二一特旨を以て位記  
を追賜せられる昭和三六・九・二六・内閣

絹子 誓誓絹善大姉(昭和二一・二・二六没)

玉子 慈照院浩登玉窓大姉(昭和三八・一二・六没)

守道

富子



例えば、**洪川驍**は『宇野浩二論』（昭和49年8月30日発行、中央公論社）の「年譜」のなかで、「**宇野家系図**」という巻物によると、彼の家は、**信濃の滋野家**から出たもので、初代は**幸広**といい、十四代の**孝教**が**宇野家**を創設した。その七代目が祖父格で、彼の名は、それから取られたものだという」と記している。『宇野家系図』という巻物によると、「書いてあるが、**洪川驍**も水上勉と同様に、直接『宇野家系図』なるものを確認しなかったようだ。**洪川驍**が「初代は**幸広**といい、十四代の**孝教**」と書くのは誤りで、これは**宇野浩二**の「遠方の思出」の記述の間違いをそのまま踏襲しているのである。宇野浩二は、前述の如く、**滋野幸経**以降を「**幸成**」——**行辰**——**幸則**——**幸教**（**宇野源次兵衛延年**中）」と記した。しかし、『宇野家系図』によれば、**幸経**には**幸成**、**幸教**の二人の男子と、その二人の間に一人の女子がいる。宇野家はその長男の「**幸成**」——**行辰**——**幸則**」の家系ではなく、次男の**幸教**の末裔なのだ。すなわち、宇野家を創設した**幸教**は十四代ではなく、十一代の**幸成**の弟なのであ

る。

**宇野浩二**が系図の冒頭で「**清和天皇御子貞之親王九代**」と書いているのは「**清和天皇御子貞元親王九代**」が正しい。国史大系「**尊卑分脈第三篇**」でも明らかである。この他、ここではいちいち指摘しないが、**宇野浩二**の「遠方の思出」とさきあげた『宇野家系図一軸』とを比べて見れば明らかのように、**宇野浩二**の「遠方の思出」には、**宇野浩二**の写し間違いや省略が多くある。

さて、『宇野家系図一軸』には、「**本国信濃**」[**滋野姓**]とあり、**宇野家**は**信州の名門滋野家**の出である。**滋野氏**は、**東信濃**の古代から中世の名族である。**東信濃**では古くから**海野**、**祢津**、**望月**の三氏を**滋野三氏**と呼んでいた。**黒坂周平**によると、**滋野氏**の「祖は『**滋野系図**』などによると、**清和天皇**の子**貞保親王**で、その孫**善淵王**という人はなく、また**滋野氏**が**清和源氏**であるという確証もない」〔**長野県歴史人物大事典** 昭和64年7月16日発行、郷土出版社〕といる。平安時代の初め、八六八年、**滋野恒蔭**が**信濃介**に、八七〇年、**滋野善根**が**信濃守**になった。その頃**東信濃**に勢力をはっていた**海野**、**祢津**、**望月**などの土豪が、**国司**として赴任してきた**名門滋野氏**と血縁関係を結び、中央に直結するために、**滋野氏**と名乗るようになったのではないかと、**黒坂周平**は推定する。また、『**上田小県誌第一巻**』（昭和55年5月20日発行、**小県上田委員会**）では、**滋野氏**が出

てくる文献は、「延暦一八年（七九九）滋野宿祢船白なるものが『日本後紀』に見える最初のもので、この人はのち弘仁一四年（八二二）になって朝臣姓を賜って」と述べる。これらから考ええると、滋野家は、清和天皇在位の八五七―八五九年の天安年間以前から存在していた名門の旧家であったといえる。

次に「海野弥平四郎代々用雁金之紋」とある「雁金紋」についてである。千鹿野茂の『日本家紋総鑑』（平成5年3月25日発行、角川書店）によると、「雁紋は信濃の豪族であった清和源氏頼季流の真田、海野の代表家紋といわれた関係から、その一門の諸氏が用いたので、信濃地方に比較的多く分布」しているという。宇野浩二は「文壇紋章調べ」（『文芸通信』昭和9年4月1日発行、第2巻4号）で、「家の紋章は『丸に横木瓜』ですが、恰好が悪いので、変へ紋として『龍踏車』を使つてゐます。」と回答している。この木瓜紋を武家で最初に家紋に使用したのは朝倉氏である。朝倉氏は広景の時、越前の国に移り繁栄したので、木瓜紋は越前から北陸地方にかけて広まった。だが、現在の紋章は必ずしも、その祖先とは一致しない場合が多い。雁金紋から如何なる変遷で木瓜紋に変わったのか、詳かでない。

この「宇野家系図 一軸」に出ている人物で、「源平盛衰記」や「吾妻鏡」や「平家物語」の戦記物語に登場する人々がいる。宇野

浩二は歴史や史伝には関心がなかったのであろうか。「遠方の思出」ではそのことに全く触れていない。

系図の最初に出てくる滋野幸広は、諸本によっては、「宇野弥平四郎行平」、「宇野平四郎行広」、「海野弥平四郎行弘」となっているが、「源平盛衰記」巻第二十七の「信濃横田川原軍の事」や巻第二十九の「源氏軍配分の事」のなかに、その名前が記されている。屋島の平家が山陽・南海を従えて勢を盛り返してきたので、木曾義仲は討手を差し向けたが、備中の水島で大敗した。「平家物語」巻第八の「水島合戦」には、「源氏の方の侍大将海野の弥平四郎うたれにけり」と、海野幸広がいわゆるこの水島合戦で討死したことが描かれている。このことは、『源平盛衰記』巻第三十三の「源平水島軍の事」にも書かれている。

また、海野幸氏についても、『吾妻鏡』には、巻三、巻九、巻十、巻十三、巻十四、巻十五、巻十六、巻十七といったように、いたるところにその名前が見える。さきに記すのを忘れたが、「滋野系図」（『群書系図部集第六』昭和48年11月10日発行、続群書類従完成会）がある。「滋野系図」は、幸氏について、「左衛門尉志水冠者義高ノ伴シテ。鎌倉へ下向。義高没落時 忠勤被召捕。頼朝却而感之。賜海野本領。任兵衛尉。日本無雙弓名人八人ノ中也。故実堪能被知人。」と記している。『吾妻鏡』には、幸氏の弓馬に関する記録が多い。

幸氏は弓馬の術に長じた人であったようだ。『吾妻鏡』卷三には、幸氏の少年時代、元暦元年（一一八四年）四月、木曾義仲の子義高が頼朝の人質となった時、幸氏が随従し、義仲が敗れて義高が鎌倉を脱出しようとしたとき、幸氏が義高の帳台に入り、身代わりになって、義高の脱出を助けた逸話などが描かれている。

次に海野左近である。建仁三年（一一〇三年）、頼家の弟実朝が三代將軍となり、幕府の実権が北条氏に移ったが、政情不安が続いた。建暦三年（一一一三年）、信濃の泉小次郎親平の北条義時打倒の企てが発覚し、幕府侍所別当和田義盛の子らも処罰を受けた。これに激怒した和田一族が兵を挙げた。『吾妻鏡』には、この和田合戦で戦死した信濃武士六名中に、海野左近の名が見られる。源氏がたであった海野家が、頼家追討以後には信濃守護となって北条氏についていたのである。

「織田信長不用風諫故切腹」したという氏経（海野平次）ら以下の人々について記した文献を探し出すことが出来なかった。大方のご教示をお願いする次第である。